

【コメント】

李成茂先生へのコメント

セルジュック・エセンベル

ボガジチ大学

残念なことに朝鮮の歴史には暗いのですが、一つか二つ、一般的な質問をしたいと思います。

江戸時代の中野天領の治め方―幕末のころ江戸時代の中野天領というところの自治にあるエリートは、または百姓は、どのようにつながって、毎日をどのように江戸の方から治めたのか―を例にあげまして、それはある意味で比較できる例になるのではないのでしょうか。李先生の発表から、近代前に、韓国の歴史の中で、中央にいるエリートたちと、村までのエリートたちと、百姓の間のつながりの組織、またその関係・政治的な関係がある程度学ぶことができると思います。

天領は幕府の治めている場所であるから、私の質問では、今までの近世史の徳川幕府政権が一つの権威的な封建制度であるとの見方に**Challenge**（挑戦）します。私の質問は、江戸幕府はどういう風にわずかな人数でそのように遠いところから、天領の地元の村からの年貢を集めたり政治関係の仕事をしたりできたのか。簡単に言えば百姓との関係をどう言う風にするのか、という問題の説明は、天領の組織から出るのではないかと思う。

中野天領というのは六万一千石の天領で、信州の高井郡というところに在った、約150の村がある幕府の治領であった。特色として、そこには代官は年に一度9月に2週間程度来て、年貢をどういう風にどれだけ収めるかなどを地元の役人と交渉しただけである。藩の大名や王国の知事 *governor* のようにいつもいるわけではなかった。

かわりに中野天領の政府の中心であった中野町には代官の陣屋があり、そこには15人の侍だけがいた。中野天領の人口は7万人以上の町人、商人、百姓、労働者などがおり、15人の役人でこれだけの人を治めるのは大変な問題である。そのやり方をみるとはっきり言えるのは、一つは代官が直接接触するのは中野町にある5つの郡中代という役の町人の家で、交換でやっている、地元の直接の代官陣屋の人たちのことですが。郡中代というのは、年貢を集めたり江戸に運用したり勘定奉行にまわしたり、代官の命令があれば村に渡したりという、天領の江戸からの命令を、何かの形で地元の人たちに渡す役割である。

その下には取締役があり、大体五つか十個くらいの村をまとめる、ある意味で大前格の金持ちの地主階級の人。取り締まりは名主より上で、代官の郡中代と村の名主の間のような存在。一つの代表者と考えていい。郡中代と取締りのもうひとつの仕事は御用達であり、代官の予算を設置するときに財産の問題を解決できる。

その下の150村は、99種類の組合に分けることができる（九十九組合）。組合というのは、例えば高井群なら上高井郡の23村は一つの組合であるが、村の山を使う、林を使う、年貢を集める、また代官との関係を作る地元の組織である。組合は取締りと違い、地元の村の名主の

一人が村全員を代表する。(地主でない可能性もある。村の名主は本百姓ではあるけれども全本百姓が地主とはならない。)直接村全体の、その地方の代表者と考えてもいいかもしれない。その下には、村落ずつに年寄がいて、名主がいて、その2つは小前と呼ばれる百姓のレベルから政治的・社会的・経済的関係を上の取り締まり、郡中代などなどにつながる人たち。

その組織は、江戸から村まで自分の命令を実現させるための便利な組織と考えることもできるし、しかし逆に村のほうから江戸の代表である陣屋との妥協、交渉、また政治環境を作る下から上へ行く組織として考えてもよいだろう。

中野天領の資料としてもう一つ、資料から、「ソンポー」と李先生がおっしゃった朝鮮の組織の場合、幕末日本では、やはり村の掟、取り決め(いろんな資料があるが)と似たものか違うものか。

例えば、高井郡高井野村の3つの資料があつて、1つは「高井野村の取り決め」という資料である。高居郡と水内郡の村の名主同士が新しい郡中代が交換で設置されたとき、彼との条約—今後郡中代にどれくらいお金を払うべきか、郡中代はあまり筆と墨などのお金を高くしないこと(名主は払わなくてはいけないから)、お酒にも注意すること。—など毎日的な、働くためのマニュアルのような資料。

もう一つの資料として「高連印帳」。高井野村の人たちが村のために掟として安政五年に作った文書である。

本百姓全員が集められて、はんこを押し、これからは札入り(ふだいり)を出しながら新しい名主を選びましょうというもの(名主の選挙方法が変化)。これは、割本とか取り締まりとか、昔からの家柄の高い人だけではなく、はんこを押す権利がある本百姓は誰でも名主の候補になれるというもの。これは政治的な資料になると思う。このような資料を見ると毎日の仕事毎日の問題を解決するための掟であり、日本の場合、儒教の思想、儒教の政治的考え、儒教の道徳的考えは間接的には在るかもしれないが、直接には見えないのではないかな。

くりかえして言わば、日本の場合、村の“法律”は農村の共同体の決める様々の取り決め又、掟であつた。その法律を作つて、又、使用したのは、掟の文書の上に、自分の名前の判子を押しした本百姓身分の農民であつた。